万国津々浦々

みんなで「共有」

福井 栄二郎
（ふくい えいじろう）
本館外来研究員

ジャムを分け合う

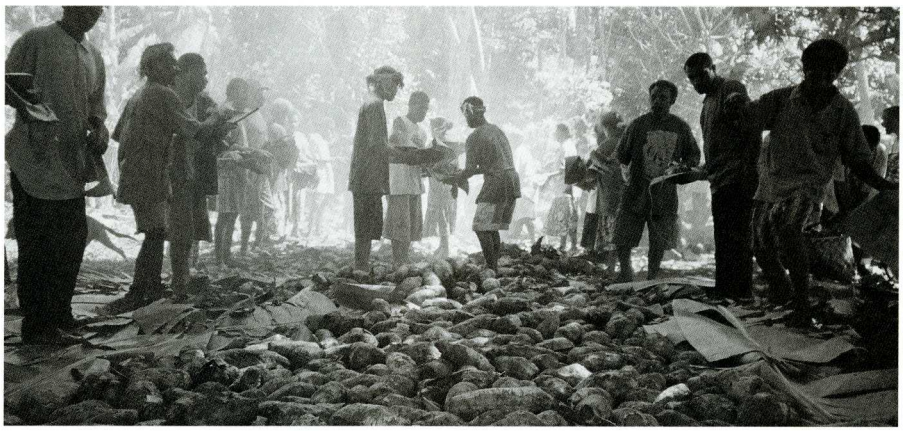
激怒のはじまりはいちごジャムだった。

その前日、日本から届いた小包のなかにあったいちごジャムは本当に貴重な「贅沢品」だった。わたしが調査している南太平洋ヴァヌアツ共和国の離島には、サトウキビのほかに、それほど糖分を含んだ食物があるわけではない。だからイタズラ好きのネズミたちに狙われないように、すぐに台所のちょっとした棚に隠しておいたのだ。翌日の朝食を心待ちにしながら。

けれども翌朝、その棚に手を伸ばすと、新品のはずのジャムの封が切られ、底が見えているではないか。もちろんネズミの仕業ではない。一足早くに目覚めた、ホームステイ先の「弟」のせいである。「早起きは三文の得」という諺はこの地にはないが、棚にジャムを発見した大食漢にとっては、まさに僥倖（ぎょうこう）だっただろう。「弟」の名前を大声で叫ぶが、彼は口いっぱいにいちごの香りを含みながら、すでにどこかへ雲隠れしてしまっている。かわりに、そのわたしの声を聞きつけて「母」がやってきた。ひと通りわたしの話に耳を傾けた後、彼女は申し訳なさそうに言った。「ジャムのことで怒るのはわかるけど、ここでは、みんなですべてを分け合うのよ」。

「アクロウ」の精神

この「分け合う」という考え方、この島のことばで「アクロウ（akro）」というのだが、英語の「シェア」によく似ている。ピザを分け合うように、みなで何かを「分割する」ときにも使うが、あるひとつのものを、みんなで「共有する」ときにも使用する。南の島の、日本とは比べものにならないくらいの小規模社会で生活していると、この「アクロウ」の考え方がとても重要になるときがある。子どもの学費を近親で「共有」したり、年老いた親の世話を兄弟姉妹で「共有」したり。要は助け合いの精神なのだが、もっと生活の根本に根付いた、義務のような感じでもある。しかし、アクロウの考え方は「ちょっと拝借」とも表裏一体。もちろん盗みは厳しく罰せられるけれど、「弟」のように他人のものをちょっと食べたり、借りたり、使用したりできてしまう。



結婚式で参列者に振舞われる大量のタロイモ

だから「アクロウ」を考えるとき、もうひとつ大事なのが、気前のよさ。たとえば結婚式の際、新郎の近親は大切に飼育してきたブタを屠（ほふ）り、大量のごちそうを気前よく参列者に振舞う。ごちそうをみんなで「共有」するのだ。たしかに大仕事ではあるが、この散財が自分たちの威信にかかわってくる。ケチと評されることが、この島では何より恥ずべきことなのである。

そうだ、大事なのは、気前よく自分のものを差し出して、みんなで共有することなのだ。「母」のことばに諭（さと）されて、わたしの怒りも収まる場所を見つけたようだ。たしかに、ジャムひとつで怒るとは大人げない。わたしもこの「アクロウ」の考え方に、いつも助けられているではないか。そう反省する。しかし「共有」にしては、「弟」はジャムの分け前を取りすぎてないか？よし、今度「弟」のラジカセを勝手に「共有」してやろう。意地悪なわたしは、そんな「復讐」を考えて、ひとりほくそ笑むのである。